

半世紀前、ルーベンスの巨大な裸婦に圧倒された思い出の美術館アルテ・ピナコテークは、すべてが堂々と昔のままで、直ぐに感動が蘇りました。

デューラーの「四人の使徒」も、ダ・ヴィンチの「聖母子」も、ラファエロの「聖家族」も。そしてクラナッハの裸婦の意図的な独特のアンバランスも懐かしい。

ノイエ・ピナコテークも今回はゆっくり見て回れました。ゴッホもモネも、それにドイツ世紀末のユーゲントシュティールを代表するクリムトも、同じ絵画館で観られるなんて「俺は贅沢してるなー」と実感。ルーノールもシスレーも至近距離で鑑賞でき、フラッシュ無しなら写真撮影もOK。なんと鷹揚なことでしょうか。アルテ・ピナコテークもノイエ・ピナコテークも、芸術を愛したバイエルン王ルートヴィッヒ I 世が創設したドイツが世界に誇る芸術の王宮です。

1965年イースター休暇で小さな大学町から華の都ミュンヘンに出てきた日本の一青年が、西ドイツ(当時)の高い芸術水準に初めて身震いした場所でした。

当時無かった「現代ピナコテーク」は、2002年に一般の寄付金と州財政で開館したバイエルン州立美術館で、Pinakothek (美術館)の常識を超えた絵画、自動車などの工業デザイン、グラフィックアート、ガラス工芸など幅広いアートの殿堂です。従来の固定的な価値観への挑戦が随所に見られ興味津々です。工業デザインの家具の陳列を見ると、曲線的で私好みの“装飾”が特徴のアールヌーヴオーから、直線的で機能的なアールデコへの流れが一目で解ります。絵画の部もキルヒナー、マティス、ピカソ、ムンクなど大変な充実ぶりでした。

ドイツ表現派を盛り上げたW・カンディンスキーなどの“青い騎士”たちはレンバッハ市立美術館に居ました。形象へのこだわりを捨て、あるいは激しい色使いで印象派の殻を破ったドイツ表現主義の作品がずらりと並んでいます。

カンディンスキー、F・マルク、A・ヨルンなどの絵を見ていると、ナチスの弾圧下でも多様性を追求したドイツ表現主義作家の心意気が伝わってきます。初めてレンバッハ・ハウスを観て、現代ドイツ芸術の根底に少し触れた思いでした。



フランクフルトでの式典参列とミュンヘンの美術散歩。帰国前日には、横浜でホームステイしたリカルダ嬢(ミュンヘン大に入学)との感激の再会もありましたし、ミュンヘン市内で難民の実態を見聞することも出来ました。半世紀を超えた私の日独交流の締めくりに相応しい旅となりました。

JDGYは今年設立7年目に入ります。今年一年の会員皆様のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます。

(了)